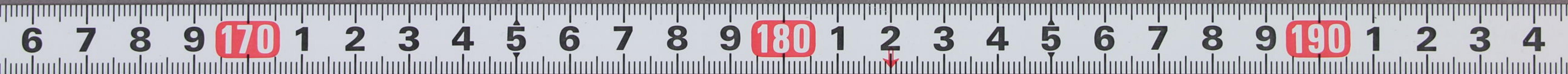


奉
解
改
正月令博
物
三
月
部
三

三





三月部目録

△卯あつハ俳偈
の季と持物人

○養生の法。雨風の老。春乃豊
の妙茶その外人家重宝のこ
處々小枝多あるゆへ
月録よこれとあるま守

三月

陰陽生 異名並註 調子

清明節

七十二候 二丁 △化の期と知 三丁

穀雨中

七十三候 三丁 花盛の期 四丁

八十八夜

三丁 土用 日天氣 四丁

三日令

此部ハ三月日の定とある
車支の定リハ三月日定とある

来子

△松尾明神御出 五丁

天手経供養

五丁 △御益北斗奉 五丁

鶏闘

△上巳節 五丁

重三

△流水節 △流錫會 五丁

靴蘭節

△桃花節 五丁

柳ツグ

△挑の酒 六丁

草餅

△蓬餅 △菱餅 六丁

日朔



三月一日録

△三日校 七丁 △次御校 七丁

△曲水宴 三丁 △水宴會 七丁
△巴の字れ水 三八丁

△雛遊 △ひな祭 △たてひな 八丁

△汐干 九丁 △三日祝儀文 九丁

△石山祭 十丁 △粟津祭 十丁

△土佐海魂石取 十一丁 △衆寺祭 十一丁

△修學寺祭 十一丁 △在留水臨時祭 十一丁

△嵯峨大念佛 十二丁 △水尾祭 十二丁

△高尾法花會 十三丁 △金毘羅會式 十三丁

△稻荷明神御出 十三丁 △安樂花 十三丁

△古野會式 十三丁 △善導忌 十三丁

△敷天台礼拝講 十三丁 △鎮花祭 十三丁

△善導御忌 十三丁 △土生寺大念佛 十三丁

△千本大念佛 十三丁 △一切經會 十三丁

△勸學會 十三丁 △梅若祭 十三丁

日九 日十 日十一 日十二 日十三 日十四 日十五 日十六 日十七 日十八 日十九 日二十 日二十一 日二十二 日二十三 日二十四 日二十五 日二十六 日二十七 日二十八 日二十九 日三十

△江州比良祭 十三丁 △無縁經修行 十三丁

△ひんがしの神事 十三丁 △人丸祭 十三丁

△釈迦御身拭 十三丁 △御影供 十三丁

△高尾女詣 十三丁 △爐閉 十三丁

△月令 此部ハ八日のことニシテ三月一日のことはある日

△順峯入 十三丁 △花の縁 十三丁

△小弓引 十三丁 △男女衣服式 十三丁

△時衣 △ミウ衣 △ミウ重 △山吹衣 十三丁
△ミウヤミミ △ミウヒ衣 十三丁

△寒食 十三丁

△時令 此部ハ三月の時候小弓

△暮春 十三丁 △春限 十三丁
△春の湊 十三丁

△三月尽 十三丁 △忘霜 十三丁
△名残の衣 十三丁

△三草木 此部ハ三月一月乃らる

△花 △能備正花非正花大器 十三丁
△花見 △能備正花非正花大器 十三丁
△庭探 △花籃 △花笠 △花の縁 △花の縁

日九 日十 日十一 日十二 日十三 日十四 日十五 日十六 日十七 日十八 日十九 日二十 日二十一 日二十二 日二十三 日二十四 日二十五 日二十六 日二十七 日二十八 日二十九 日三十

三月 目錄

三月菜 野 △若菰 三

△菰 野 △胡蔥 三

△櫻のり 野 △茶摘 三

△かき茶 野

三 生類 此部ハ三月一ヶ月の生り

△呼子鳥 野 △麥鶉 三

△引残る鶴 野 △雲入鳥 三

△鷓鴣 野 △蛤ふら 三

△櫻負 野 △櫻鯛 三

△若鮎 野 △上り梁 三

△吉饅 野

三 必用 此部ハ風雨の占の破戦の

得の作事の占の料理献立の法食物の好悪等其外品々あつむ九日の定たる事ハ日の今の部はあり爰ハ日の定する三月一ヶ月の要用のこと然あつむ

三月 目錄

三月之部

△印ハ季と持物不用るもの



今月百花咲やころび遊賞する人々の故障あるハ風雨明日の事より山野はあそびて情そのよへ

五陽ハ三月の異名の沢天夫ハ五陽長ク二陰消する意夫ハ去るの義

異名

季春 中姑 春晚 稷月 蠶月 暮春 殿春 五陽

鶯時竹秋 春末 春杪 残春 春 婦姑洗 弥生 花見月 櫻月

春惜 一み月 ころもる月 花津月 夢見月 志めい月

異名註

○季春ハ三名のたる ちり 中姑ハちり

ころもる。稷月ハ上己のちりいする月ちりハちり。蠶月の

かゞく作る月といふ事なり。暮春はたるの令名。殿春はたるれ去んざりと云意。五陽は註あり。鶯時はうをいどのなく時。竹秋たぐんかの時をいづく。春末はたるのとも多きなり。春杪はたる乃れくる。残春はのころ多し。とひあつるあり。春帰はたるかか。唐うへ。姑洗は姑の古あり洗をわく。之万物皆を去りと去りてあつし。くをけ義あり。弥生は春の陽氣よりて萌へ出る草もこの月より生ひさくる。なればやあひ月といふこと。此界してやよひといふなり。

○秘藏 ささるる月

たはへるもささるる月あり。ささるる月にささるる月あり。花津月

莫傳

花津月 後の名のあり。

ひましくこれに社われぬ。

藏王 ささるる月

かへて今ささるるとして梯月。ささるるありは方の山あり。

莫傳 夢見月

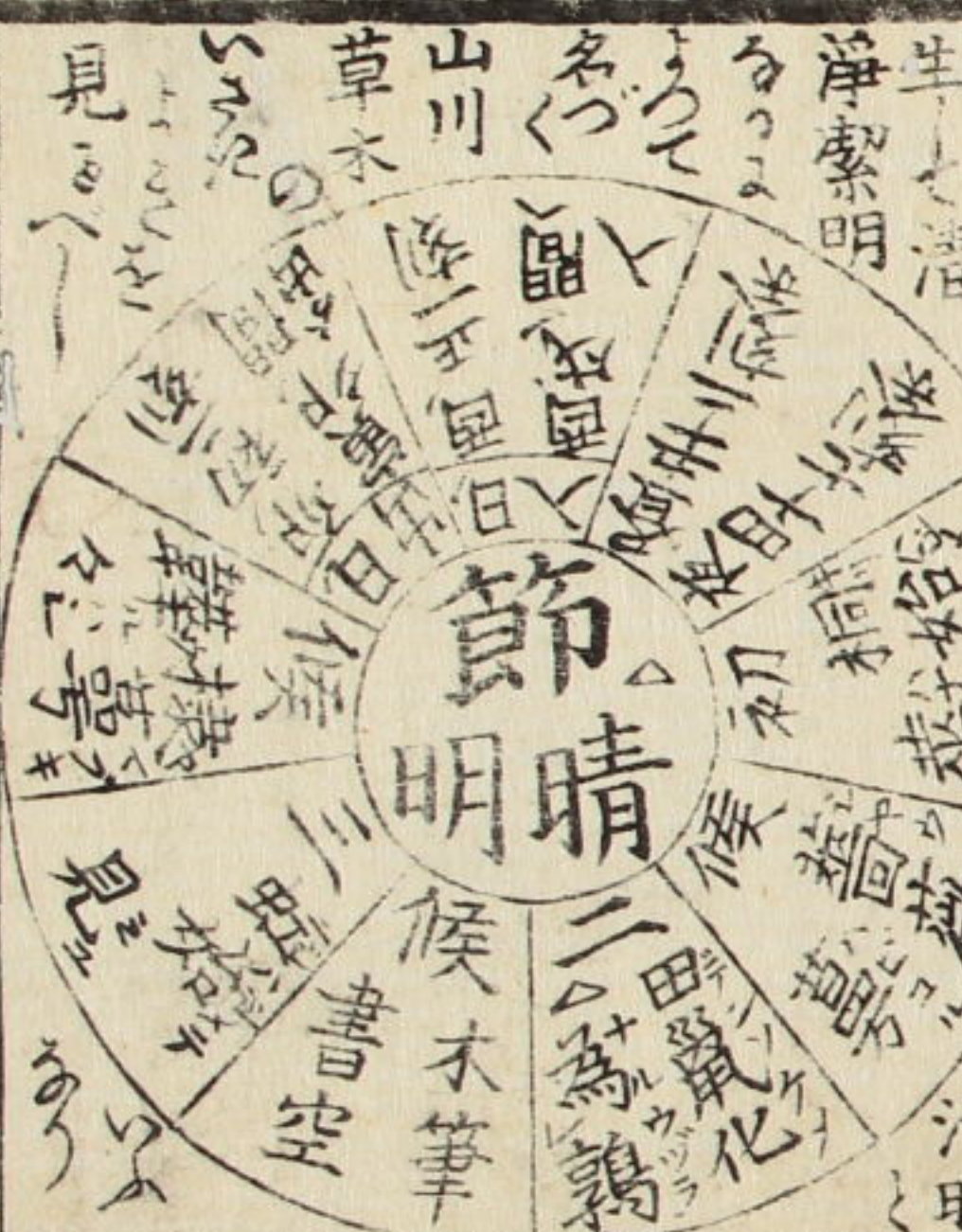
ささるるささるるの山乃夢見月。嵐のさかた雲のささるるをぞ。

藏王 花見月

うとくありをいづくのむ見月。あててあつるもあつるをいづく。

節。立春七十二候。草木七十二候。昼夜長短。日出入等左記を。

此項萬物誌

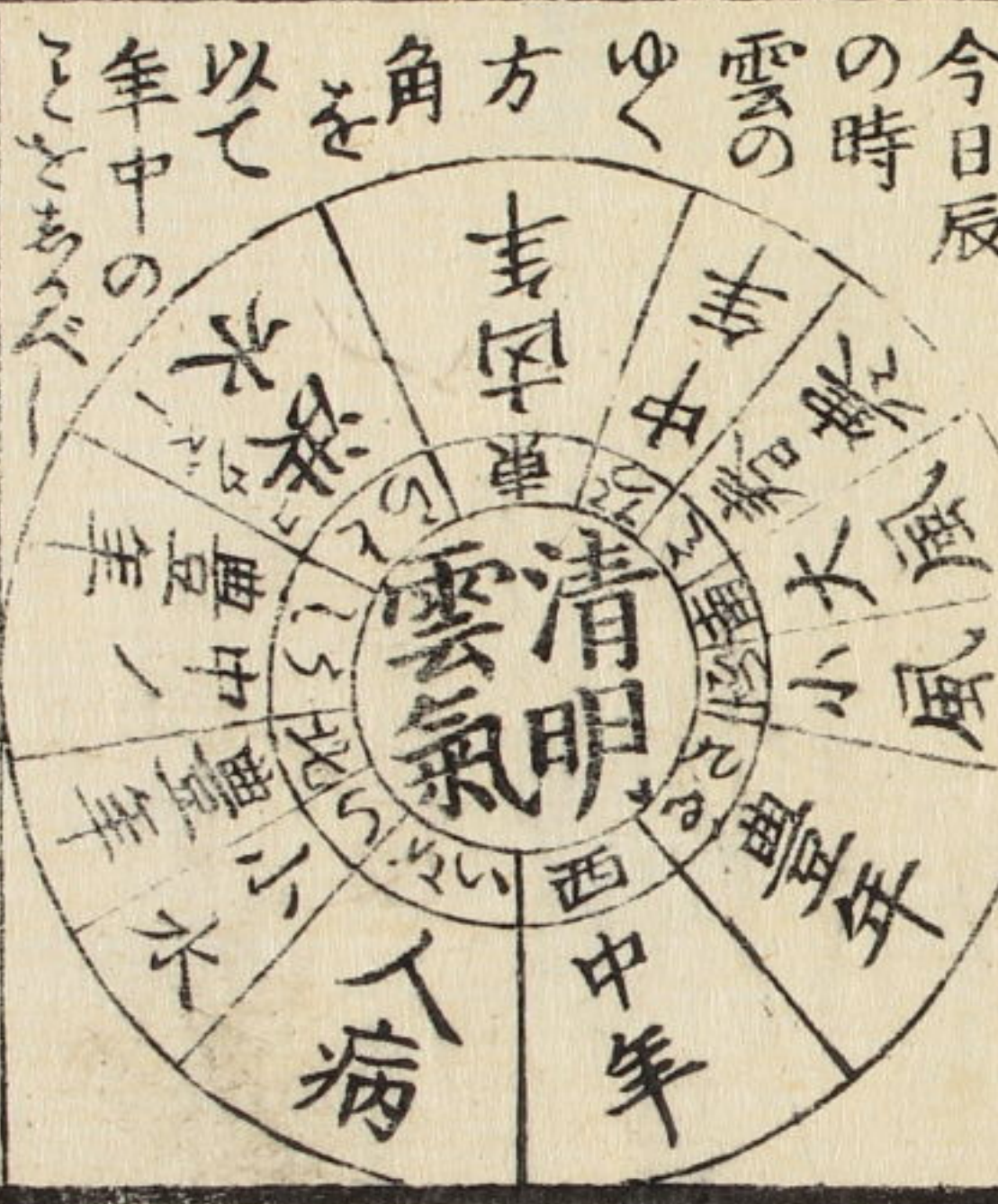


同華著撰此ごろさくあり一書小
あり虹始て見ゆはしのころ事
あり是寒氣ふつて雨氣あり
といへとも虹のいつと不成りく虹い
雨氣ふ日の映してころあり一書小
鴻雁北とくあり北へぬる
○此節より雪あり 節占候

雨少くてあつたりま入暗るまは
早蟄収る昼より後暗るまは
晩蚕収る○風東北より吹バ月
未に至るまで米の價貴し東南
より吹ハ中旬ふ米價貴しと
ども月未に至るまで賤し西南
吹バ月末又米價貴し西北
かけ中旬又米價貴し

節花期知 年の寒暖ふつと
あり伏見桃山櫻津稲田其外
凡此前後ふさく櫻も一重なる皆

さくより彼岸櫻をい殊更早し
名木八重等ハ遅し中穀雨の取小陸
今日辰
の時
雲の
ゆく
方
角
を
以て
年中
ことある



清明日偶題 王世貞

穠李夭桃名闘新 李ト桃ト送
テ新ニイタレム 傷心眼底上墳人
開ケリ 傷心眼底上墳人ハ庶
人墓所ノ掃除ニ行テ見レハ
無常ヲ感シテ心イタマシキトシ

生憎介子成寒食破損風光一
日春 風光ヲ空ク過クエハ介子推
推ヲアハレムナリ 唐ノ忠臣ナリ

推ヲアハレムナリ 唐ノ忠臣ナリ

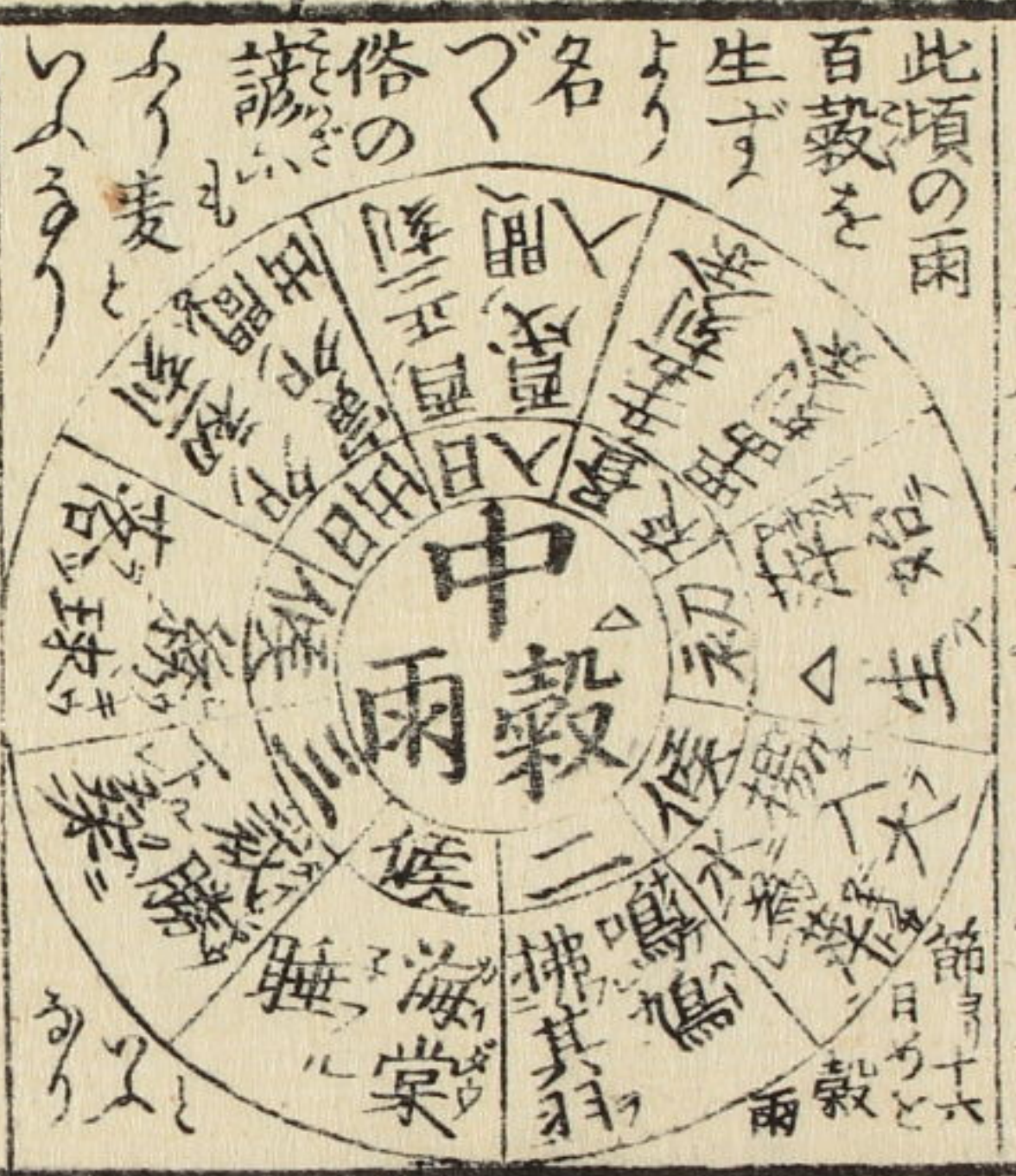
妙術 去樹虫法 今夜子の刻 樹木の上をくぐりて

くぐりてをくぐりけりし生せむと
辟諸虫法 今日戌の方け上土

を取りて狗の毛を煎じて泥土
とすし屋内門戸の孔穴を塗

まへ蛇其外一切の虫家の内ふ今
事か一月令廣義ふ出たり

中 七十二候。草木七十二候。日ノ
出入。昼夜長短。左ふあるす



萍始生頃日池の中陽氣
蒸まて草生と一書小菽とも芦

ともあり揚萍成鳩鳴羽拂も
春の陽候あり一書小第二候

牡丹華さくとあり裁勝とあり
あり桑ふ下れえ絳球の櫻桃あり

妙術 治熱病法 今日茶
を炒て蔵め置と此

茶と煎て呑め痰嗽百病
一切の熱病を治るなり

花盛期 吉野山まで山上を
遅く山下へ早くと

へとも中より七八日前と盛守京
智恩院棋津鷲尾山とて八重

九重の名木ハ此頃をり御室鞍
馬八幡等ハ今五七日も遅

八十八夜 立春の節より八
十八日めぬいあり

俗説ハ名残の霜といふ凡春
の氣終て夏れ火氣に亦化す

るの節をれ霜も此頃より
あつてもいふより此と

霜降をば草木のうらぐらを
損をかひて其をばをさへ

○綿をまうくハ此前後より八十八
夜の前の四月五日までまうくあり

土用 一年四季ハ土用を合て
一季七十二日として三百

六十日あり土用の中央まで信守り
四季春木夏火秋金冬水の間ハ

配して十八日三分であり十九日の
事あるも刻數までいやより十

八日三分あり三月節小入てより
十三日ハ土用の入りより夏秋冬同是

土用天氣 土用の内西北より
聞て一日の中雨あり

然れども北風吹出せば晴る南
風ハよきて雨とある○雨ふりつぐ

とれども北風より出せば雨暗ると
又ども三四日の中又雨をりよ

不ぞ東風よそとあり時ハ晴
はぐく土用の常の天氣と異く

日令

三月日の定まる事
支の定りたるは記す

午 桑子

桑子 桑子 今日蚕を
初て桑小付るを利

上 京

松尾明神御出七日の間
御旅して法楽の能あり

朔 不成

天氣 晴天ハ五穀ハ
まうか

あつた人病事多し○大風吹
ハ病多く草木亦多し○北風

吹て朝より未の時ハまう
まで止まれば米價貴し

江戸

紅毛人如丹筆二
晴外療登城日 天氣

今日雨あれば
早にたる

大坂

天王寺經堂
の經供養

刻ふ
あつた

養生

今日夫婦の
交まふ守 占

候

今日風あつたハ梨樹ハ虫食す
雨あつたハ葉の葉あし未

母はうし夜ふ入りま 御燈と
蛙あくさけい早マ守

北斗に奉る むうし北山の高
き峯に火を燃

て北辰よ供せしきけりともや今
御殿の北向小御座をききて

御拜あり 鬮雞 禁裏ふて
とたり 朱萐院の

朝十番の鬮雞ありしうし今ふ
も是を行らぐ事よ

能炭ふのまきたぬ神ひふ晋子
分らして松とつてわまりか幽調

狂雞も相撲ふ似くろりあ坂の
園のかりごあふる物に決路宗増

上巳節 上の初の儀さう初の
己の日と以上巳の節

以後後世三日小定し奥の己
の日此後所記と重三州

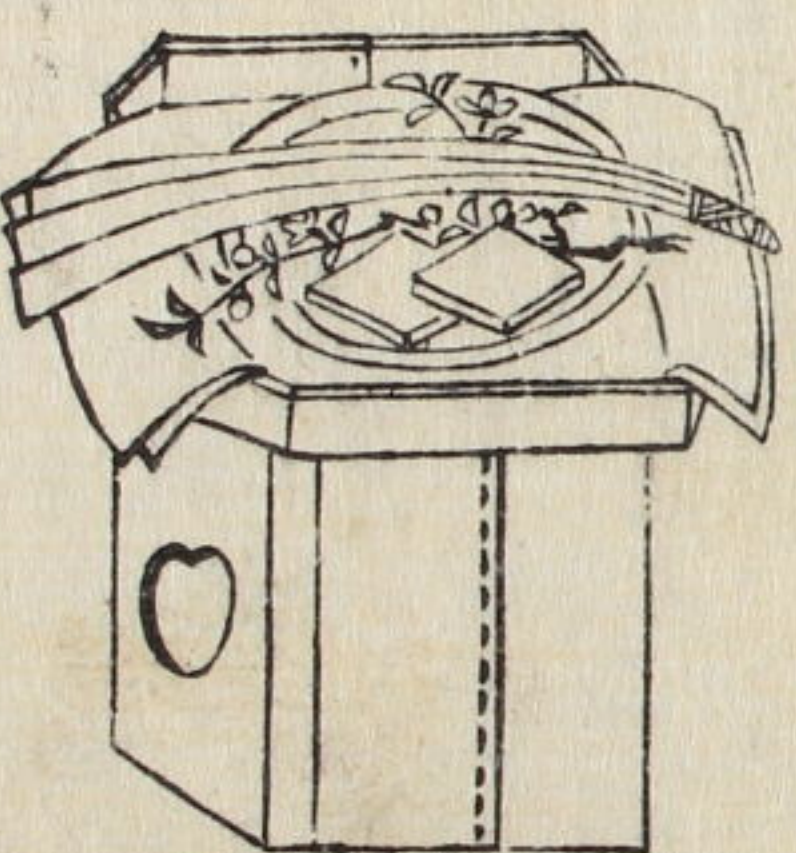
日も三つれ △曲水節 △流觴會
をかくいみ △執蘭 蘭と水上いりて不浄と

後除する事詩経の鄭風か見う
△桃花節 唐の世小三日と冷節とつけり
本朝三日と桃花の節とつり

桃花生玉澗 柳葉暗金溝
右の詩事文類聚上巳の処出さう

生花式正 桃。柳。やまぎさ
らん等をのけべり

三月三日
三方
諸禮家
本式



夫木 為家

我がうりあくま七花小碎ふたり
笑て入りりのきふをころれも

新撰六帖 光俊

柳のよま嘆や誕生の三日け系
このの候りも今さうりる

非桃の日やゆ成り麻うと初五川
曙やよの桃花の影れし其角

柳今日柳と桃花酒今日

酒和して呑と月令廣義よあまと其能よく瀉下す殊更千葉

花を服をれを出てやまんと本草かあれ吞べ飲たてて

ふてかざん事も風流の公朝

夫木公朝天の川の極や嘆めらん

非五池のや茶林の麦林

狂飲の斗りの酒立圃

草餅蓬餅の餅と取餅と龍餅

と名づく今日食とる事唐も

草の餅を用事あれ古へは是を用いたり艾も能れ

物をれ中世より用るとまる

非常の味をあづく仲の嶺嵐雪

狂かんもあるとを能るの

己日水抜て疾を除くとまる

是周の世を用る事魏の時

己の日を用る事當月辰の月

帝元年上己日清花は御幸あり

須磨御事日本紀出る

須磨御日の嵐方

拔光源氏須磨の浦左遷の時陰陽師を仰せて御拔たま

了舟小人などほろり **曲水**
てみせし事あり

曲水 巡水宴會 周漢の世の後
盆を流とをる 曲水の

の事多く出されば唐も久し
きことるべし川の辺り小道

して流水小杯を深へ其杯の我
が前と過ぎり先に詩と作りて後

杯ととり吞する事と本朝のみ
顯宗帝の御宇より始まれり

⑤ 草庵 頓阿

るる初花の表までとまじり

まじりてのそいかにもみかた

夫木 後京極摂政

ちる花をさへへの園居れまを

流るふたふたま乃さつと

同 定家

かろくのおと流つてつるさうの

流よまじりてふたふたま乃さつ

⑥ 詞みぎをまをれげゆゆうふ

たるさす川あほふまをれふさ

⑦ 曲水の形巴の字より朗詠ふも

出たり○水成巴字初三日三

月三日と初三といふ源起周年

後幾霜周年といわゆる年月

といふ周の世ふとをて作ま

周公且洛邑して曲水の宴と始

めりしやうのくがれ年月とをら

⑧ 夫木 定家

かさかか巴の字れあひはて

そつにのさるまのさうみ

⑨ 曲水之詞 王昌齡

雨歇揚林東渡頭永和三日盪

輕舟 春雨コロヨク暗テ解ラ

故人家在桃花岸直到門前溪

水流 今日志ノ行サキノ友父子ノ家
八桃花ノ咲ク岸バタニアリテ浮

川ノ水カスクニ門前ニテ流ニス所ナルゾ

同上

畫笈揺浦淑 コト 故事修春禊

春服滿汀洲 ニ 新宮展豫遊

詩 同七字對句

詩 礎

烟開蘭葉香風起 ハク 白鳥飛

岸夾桃花錦浪生 ヒク 引飛觴

永和春色千年在 ニ 舞鳳樓

曲水郷心万里餘 ニ 泛觴遲

雜遊 △雜祭△雜飾△立雜△故
遠天皇二年小始る○雜

後の良より身ニ 体と母子離れて
撫て水小流一凶事と除く

○又離れり鳥の子の惣名入あ
らしこゆ名とる小女是と弄

内と守るの故より昔に常はもこの
事あり近代に三日小限る即季と指

狂 狂 辨 辨 狂 狂 辨 辨 狂 狂 辨 辨

詩 上己看花 明 楊基

東湖東畔柳絲長 ニ 滿苑飛花乱

夕陽湖水ノ川畔ニ柳ノ條長
夕陽クシタダレタ日ニハ花チリ

流水餘金香 弥生ノ後 事ス

二ホヒウワリテカホレリ
又油花トノ故事ニモトレリ

詩 同 劉得仁

未敢分明賞物華 十年 如見夢

中花 世間ナニニ節句ヤ花鳥
ヲ樂ムトモナク十年バカリ

ハウレイ多クウカノト 遊人過盡

花ヲミルモユメノゴトシ 衡門掩獨自凭欄 到日斜 風景ヲ愛

シ流鶯ノタメニ遊ビ来ル人スギ去リツ

キテワガ家ノカタオリ戸モ戸ガシテ

只ヒトリランニヨリ彼レコレトオモヒ

メクラスウキニオホヘス日モ夕ムクナリ

○泉州堺浦。土佐硯石取。其外諸國沙

干の處多し。爰小て畧ハ

○天木 家隆

あつたの波子はまも何るらん

源のあはれみわろく枝を

夫木 師光

俣野の浦はれなれな語りて

郊乃乃つと小貝やわらりん

詞度はうろ春の浪をと袖風

いささる。ゆりけて。かちさる。内外

の浪を以て神貝ひひふ。玉ひひぬ

○非 陸奥戸部郡。赤松。戸部子。貫十

一月も日も二の浪をたけけけ小唐吉

親あつた比目とふも波子小其角

蛤ふはまるとたけの形あつる移竹

ゆりてとてい見跡とゆり小十磨

狂仔りやびんぬめもはけ子浮

ゆかたゆくねとそりさ。常葉菴

三日妙術 花を窺乃上又ハ

孫の居間小まのむむい。蟻とあ

ぐ。辟とさまり。○苦棟の花

と。花さくハ葉はてもさうて

臥房の下にハあが登あつとと

辟さく。○今日又つちの辰の日

に養の花桐の花芥菜と衣服

の中へハとひびひ。い事さ

面の光沢と出す法 今日桃の花と

採り収め七月七日に雞の血を取

る二味和し勻へて毎夜うぬぬ

え。三四日ふ至て顔色はやく出

老るるもさかく見ゆかたり

狀笑上己之文 真對ハ尺牘多ク

一色破上仕ハ先ハ以ハ沙勇

慶修尺一 簪笏 平

勝之吹沙在 亦私意ハ

安 可嘉 可喜

修白輕傲之云々重ク始カ

僅

海魚 二種 魚之仕ハ新

供 雙魚

上己之沙仕候上云

祝 上除之辰

式斗々登ハ之燈儀云

幸標入馬

尺牘 上中下書留

供雙魚 上 獻海鱗 送溪魚 上

除之辰 上 己佳日 上 後禊令辰

蘭亭會日 幸標入 上 伏乞鑒

納 勿訝其不腆

三日 踏青鞋履 唐士ノ俗 士女子野

遊スル 祈社 女巫水ニ臨ニテ後 除キ

福ヲ祈ル風 祓瀨 武帝位 二即テ

俗通ニアリ 數年子ナシ平陽王良家ノ子

ヲ十人余リ美麗ニシタテハ 力ハヲキ武帝ノ霸水ノ上ニ

祓シ玉ヲ飯リニ立ヨリ玉ヲヤウ 二セシト漢書ニアリ其外祓瀨

金堤石壇ナド皆今日祓セシ故 事 蘭亭 晉ノ王羲之會

多 人ヲ集メテ酒宴ヲ催シ禊ヲ ナセシトアリ蘭亭ハ亭ノ名ニ

油花ト 唐土ニテ婦女薺ノ 花ヲ油ニ点ジテ祀リ

ヲナシシラ水ノ中ニ蘸ニテミルニ若 龍鳳花卉ノ狀ヲテセバ吉ヲ得ルトス

近江 名山祭。古来の朔日より三日まで日々種々の式法あり

今日朔日新宮大明神近津尾八幡宮兩神輿新宮の拜殿お出御出御お出

し神樂あり三日兩神輿三十八所明神の拜殿お渡御ありて衆徒集りて法樂の奉幣あり御酒と奉りて後神輿還幸あり

粟津祭 江洲鳥居川にて大友皇子の灵を祭る今絶う

京 加茂神事 三月三日あり洛北靜原祭右ふ同し

土佐海硯石取 土佐國の海辺に三月三日干

浮小海中の石と取り取りこれを硯小作まへ至て佳あり

四 排古里ひぐりのま 當時日ひ 出替い 今日

と用也古来の二月二日之排出替いやかきかき地あり巖

日五 養生 今日とべて物の血を見りて代いむ

京 建仁寺開山忌 高野村祭 修学寺赤山明神あり

△乘寺祭あり神三社あり一八大天王ニ比良貴天皇ニス天皇

日六 妙術 今日桃花と様はな今日井華水い

厄病やくびょうのい 京きやう 一乘寺村天王社い能あり

日七 今日齋 天氣 今日南風あり戒沐浴い 色い五穀い忌

夏早なつ北風い 大和やまと 茶師ちし寺い寂い勝い会い 雨あめ豊年い 勝王い經い講い

信濃 下諏訪大明神祭い 今日鹿の頭七十五い供い氏い人の

集いまりい事い増い減いるい右いの内い小 兩耳いちいりいらいらいまいていついあり

京 泉涌寺 住吉大嘗 開山忌 大坂 會い 天王

日八

寺より樂人十六人來りて舞樂を奏し伶人の舞あり

中名清水臨時祭。男山八幡宮。小石中の午日之南祭と云名高

祭は是將門と七一乱と鎮め給ひ御報賽ふて天慶五年より始

上総 中山法華寺千九不成部執行十七日迄 日就日

京 大念佛 大坂 住吉小 水尾 嘗會

祭 丹波國東田郡愛宕山十 清和天皇の山陵祭 日 京

高尾法 贊岐 金毘羅會式あり 華會 或は市といふ四日よ

了十二日まて 中 近江 三尾明 參詣群集 日 神祭 日 午

京 稻荷明神御出御旅所西九 條東寺建立の時老翁とあり

猶と稱ひて現く弘法大師則芝守 長者と云者の家と借て入奉り其

日今月中午之北日と経て四月上卯 鎮座成り此例とて今日迎奉ると

一十 京 安樂花。西加茂上野川上村 右の三郷より傘鉾及ひ

子物といひて今宮の社に群集と ありやまひひかかるとや可是ハ

高雄かて法華會やすうふはとあり 終よといふそかくとやいとうり

哥を雄心ありけりほとあり なるそへれと敷るゆえ 西行

非 山嶽もやまひ 大和 吉野會式 花と見月のか 暮 子守勝手

兩明神の神輿本堂 出御仁王経修行と 日 二 京 永観 堂善

導忌。悟真光明善道大師の階の 世を生き唐の永隆二年三月十四寂

東禪林寺 永観堂又ハ智恩院 寺中善導院等ふて修行す 今目 昔迄

近江 敷山天台礼拜講 日吉 八王寺拜殿ふて行ふ 今目 昔迄

三十日 京 長講堂後白河法皇御忌
○大佛蓮華聖院開帳後三十三天

四十日 鎮花祭 三輪・狹井・二神
とまらる神祇官

頃疫神祓ひや、侍ふらるる

京 △善導大師御忌修行あり
△壬生寺大念佛十四日より廿四

日、本堂の前ぞねらり念佛を
し、めまもくの狂言をつくす

非 声のてふ、なるといふ、淹列
△嵯峨十本念佛。皆疫後の遺意

五十日 京 祇園一切経會拾芥抄出
聖護院の森熊野権現祭

△勸學會 康保年
中大内記保胤文道先達の学徒と進

めて始り、勸學院三條の北雀の森其
跡、近世四條大宮の西ぶらり

江戸 隅田川木母寺大念佛
△梅若祭 吉田少將の男入ふ

欺きて東海小趣と病ふりて死を
塚の柳を植ふ、至迄大念佛會を以て、

○浅草第六天祭 ○下谷
稻荷祭 ○浅草念佛院中

將姫法會 ○芝鹿島御穂
而社祭礼隔年執行とる

諸方 ○藝州巖島會十五日
○江州比良祭昔山門領あり故

十六日 黄姑侵種日 天氣 西南の風
の早りを

主る風烈しけ、は、弥早強し
唐土の人、是に依て錢百文を

軒の下にけりて風をうらみ、
風の下の錢をうらみとあ、

されば豊年と、又強く動けば
早らして其用意をさ、

忌旅行 今日遠方へ行事あり
一、是、不慮の難い

無縁終修行 昨十五日より廿
一日迄、棋州中守

三月 日令十六日十九日 三十四

觀音野崎觀音等參詣後十八日
觀音懺法修行せしむ故なり

十 不成 江戸 △浅草むん
就日 江戸 ざくらの神事

祭礼ある年のこの義より
神輿本堂の遷座法會あり

八十 江戸 浅草三社権現祭
丑卯巳未酉戌の

年行りあり。池上本門寺千
部修行 今日より廿七日まで

大坂 淨光寺觀音懺法○
大龍寺觀音會 摩尼山

人丸御影供 明石にて修行と
昔の毎月今日内裏の和哥所小の哥
の御會有り今も和哥好公哥會あり

九十 京 嗟哉親御身試の如来の昔
父の牛小生と歎と佛果と得ん

為如来と試衣と牛小生と藥多是
より毎年如来と試衣と白布と泰と入徳

廿一 諸國弘法大師御影供
大師入定の忌日ふして紀州高野
山の勿論京東寺高雄ととめ

国々一宗の寺院に法事あり
△高尾女詣常此山女禁制あり

今日よりいづれありて参詣
群集とるは江戸とて川寄大

師河原参 大坂 住吉たが
詣甚多し かの御影

廿二 天王寺大字堂 廿
法事音楽有 日四 近江 礼拜
講十

二月十三日修行廿四日廿五日と新礼
拜講云敷山大衆の僑奢と歎て

山王大師昇天志ありん託宣有て冊
木黄小変守大衆驚き法華八講を

修行し神と并 不成 山城 二の瀬
慰奉るあり 日五 就日 山の神祭

大和 南都般若 養生 房事と
寺文殊会 飛べし

今日沐浴して身を清くし奉る神
氣さなるに成て諸病を患へむ

八升 近江 比叡山にて山王祭
用ゆる神とさうさる

晦日 又炒塞としかけり茶
人の炉とぬさぐをえ

茶湯の法十月より今月晦日限
めて四月朔日より風炉をり

詞 交とさうさる。春の名病。
非 非 非 非 非 非 非 非 非 非

京 千本引根寺念佛。堂前
普賢像の櫻あり此花乃

開くと期して念佛と執行と
此花凡立春より七十五日頃ふ咲く

月令 此部ふ日月の定まり
る三月三月の裏と記す

順峯入 春大峯山よると
順の峯せりんと

本山とてハ聖護院宮御門主天
台宗より當山といふ醍醐三室

院御門主真言宗より役行者三
十四歳の春葛城を経て熊野を

経て大峯と踏分けぬいと順の
峯入のよりちうとて本山の御旧

格より春毎小御代參順の峯
入有之順ハ本山より秋を逆

峯といふ本山當山ともいぬと
けたまふ事七月の處み記す

能 能 能 能 能 能 能 能 能 能

花之縁 俗説
い名のまて花雷

小三月と婚姻ふ忌むいとハ或説
花の淵よりとさうさる岸をく小多

あるといふ。詩経小桃之天々其葉
蒸々之子于歸。桃の花咲く頃

女子と嫁入さる事ハ爰と以て見
るさるハ婚礼ハ忌むいとハ非なる也

小弓引 昔内裏して此事あり
地下に春の遊びあり

哥 杖杖の移りて世のうれさふ
善のあそびぬるといふをく慈鎮

衣服之正式 綿入と着と袴の柳色き

時衣 △櫻衣表赤△櫻重表持赤

△裏山吹 △黄今し衣表青

あふのもちろそふ花のうら衣

とそふ山路より日影のうら

女衣服 白ふんぞ白ちりめん

の類ふ水山吹り櫻

川よりまよそふ暮行るるのも

やう金銀くを以てあがきたる

を間着あてひんぞひちりめん

の類をうらういさる又も色

らく花のよまうけうらうひも

りらゆらこをやういあうも地

登ふを上着ふとぐー是の

上つこの式より四民是ふあう

寒食 冬至より百五日の清

明の節前二日といふ

此日より清明小つう唐土よ

先祖の墓所を掃除して祭を

さす事今日と十月朔日いあり

草木初て生る時を以てかり志

わふ人の墓所小行て拜掃とぐ

俳 寒食やいひるは子を福ぞ 琴風

寒食之詞 韓雄

春城無處不飛花 城下處々春

寒食東風御柳斜 春風柳ノ枝

影色 日暮漢官傳蠟燭 今日漢

火アラタメテ 諸臣ニ下シ與ヘ

賜ルナリ日ノク カタニ新火ヲ

点シテ禁 青煙散入五侯家

門ヲ出ル ノ貴人カタ火ヲ賜テ

オノクヤ シキヘカヘル

詩 全 韋莊

滿街楊柳綠 絲煙街ノヤナギ

如ク春ガ スミウツエガキ

リテウル ハシキニ

畫出清明二

月天

清明ノ天氣イサギヨ好是

隔簾花樹動

簾ノ内ヨリ春風ノ花樹ヲ吹キ動

影色ヨシ

女郎擦乱送鞦韆禁中

ノ女中鞦韆ノ繩ヲ引キノベテ今日ハタハフレアツブニ

寒食故事

榆柳火

唐士ノ政年中ノ火ヲ改ル

ニ榆柳ノ火ヲ用ユ春ハ木夏ハ火ニ属スル故木生火ノ義ヲ以

今日改ルナリ論語ニ燧ヲ介キツテ火ヲ改ムトアリ

子推

春秋ノ時晋ノ文公ニ仕ヘシ介子推トイフ

賢人ノ燒失レ日ナレバトテ三日ガ間火ヲタツナリ

食

秦ノ人ハ寒食ト云ハズ熟食ト呼ブ火ヲ用ヒズシテ

ヨク食物ヲ熟スルトノ義ナリ又齊ノ人ハ冷節ト呼ビ禁煙

トモイ

杏粥栗粥青精フナリ

飯青飢飯桐楊ノ葉ヲトツテ飯ヲツムレバ青ク光リアリ

コレヲ食ハバ陽氣ヲタスクトス

鞦韆戲仙

戯彩ル繩ヲ木ニカケ架ヲ夕テ、其上ニ坐シ立テ其繩ヲ引

ウゴカシ傳燈

漢ノ世ノ政寒食ニ火ヲ

キヨメテ日暮ニ燭燭ニ新火ヲ点ジテ近臣等ニ賜フコト

アリコレ寵恩

拜掃唐ノ開元

年中天下ノ士庶ニ勅シテ先祖ノ丘墓ヲ掃キキヨメテ祭

ルベシトナリシヨリ此日ニハ貴賤老弱群集ストイヘリ

時令

此部ノ三月の時侯小ツル事トシ

暮春 三月廿日頃より末と云
三月晦日といひても不吉

連吹ざりよゆくや春風の風宗祇

非約なきれんきささ夕ア弘永

狂言の世より遊子のせんぞの

少くあさの遊ひくせり 重故

哥 嘉元百首 為実

ふさふさの二月のふさ乃あは

千五百番哥合 寂蓮

あづまの春の初へさ今あさ

夏はもはあさの山乃山今

詞 九多。さるま今いくら名はま

夜花ちりもゆれぬ花はるる

古葉はるる。春はささいゆく。春

小入。花をぬれ入相。春の名は

とる。有明月 三月十日の

あつらうやふくく。あつら

引もさめぬえれ 夕日 春はれか

入。ゆれぬやい山 雨は人のま

洞。老。春をさるる。春はれ

さむ。春をさるる。春はれ

春はれ。春はれ。春はれ。春はれ

詩 陌上暮春 武元衡

青青南陌柳如絲 柳色鶯聲

晚日遲 柳枝夕鶯声ノサエツル

何處最傷遊客思 春風三月落

花時 伊ツレノカカ遊人ノ思ヒヲ傷

ノ散落スル時トナリ

詩 暮春魏州東亭 岑參

柳鞦韆花復殷 紅亭綠酒送

君還 柳鶯ノ奥ヲ催シ花ノクレ

君ガカヘリ玉ヲ送リ 到来面谷愁中

送別スルナリ 月歸空磻溪夢裏山 画谷磻溪

川ヲ云旅ノモノウ 簾前春色應

サヲ思ヒヤラルハ 須惜世上浮名好是間 春氣色

名聞ハムタナフツヨ 西望郷関腸欲

断對君衫袖淚痕斑 君ヲ送別

郷ノコヒシク君ノワカレニ衫袖モナ

三ダニシホリアムサルナリ

詩暮春五字對句 同上

啼鳥春將盡 誰知心裏恨

落花雨未晴 已過夢中春

詩全七字對句 詩礎

如流春色催詩賦 坐情春

欲盡花香滿衣巾 鳥空啼

ケイノイノキタツテモスニシウホノテン

村山嶺瘴来雲似墨 愁暮天

洞庭春盡水如天 蝶怨風

詩暮春之詞 王維

廣武城邊逢暮春 汶陽歸客淚

沾巾 暮春ノ頃故郷ニカヘテ

鳥揚柳青々 渡水人 暮春ノ景

西ノカタドリ出ス花落ツキテ山

ノ鳥声モモノサビシク柳色ヲ

ツヘテ水辺ヲワタリユク

人ノナゴリヲヲシム

惜春 春の限 夏らる

東海もくもく 春の意ん 湊とく

運情ももも 春の意ん 湊とく

春湊 春の意ん 湊とく

あつまるももとも

新古今 寂蓮

春のついでに春のついでに春のついでに
春のついでに春のついでに春のついでに

三月 盡 三月 晦日 といふ
一日ふかだまう

哥 哥苑抄 行尊

春のついでに春のついでに春のついでに

夫木 唯残 半日春 千里

一平にまうこ二びもさうのめと

日 両処春光同日盡 千里

春のついでに春のついでに春のついでに

詞 春のついでに春のついでに春のついでに

花のついでに春のついでに春のついでに
春のついでに春のついでに春のついでに

連 大くの月日どいばさかき

非 雨のついでに春のついでに春のついでに

詩 三月 盡 之 詞 唐 韓 偓

樹頭 初日照 西簷 樹底 蕙花 夜

雨 沾 花 二ウツロヒノキヲテ

ルホヒシテシキ 外院 池亭 聞 動 鎖

後堂 欄 檻 見 垂 簾 外ノ戸ヲアテ

来ル人ノアルニヨリ 女中 柙 腰 入

戸 風 斜 倚 榆 英 堆 墙 水 平 淹 柳

ノ水ヲ、ヒ風ニナヒク 把酒 送 春 悵

悵 在 季 年 三 月 病 懨 々 今 三

ゴリヲラシムデ 酒 宴 ラツナハル中ニ

毛 物 ワビシク心ホキハ 三 年 ヤミツ

ツケ 今 春 モクルレドモ 病

愈ガルグモノイトハシキトニ

詩 全

今孤楚

小苑鶯歌敬長門蝶舞多鶯モナキヤ

蝶ノトビカフ時ハ春ステニ暮ルハニ至リ長門宮モ物ヤビレキゾ

眼看春又去翠輦不曾過久シク行幸

ナク御クルモノトホリスケルモノナク今年ノ春モアダニクニケドモ行幸

ノサタモナク君ノメグミヲウケヌヲナゲキタルナリ

詩 全

賈島

三月正當三十日風光別我苦セイタタ

吟身キンシ三月晦日ナレバ今夜バカト共リノ春ヲ惜シムルナリ

君今夜不須眠味到曉鐘猶是モトメテ

春余リ名残ヲシケレバ今夜ハ眠ラセシ曉鐘ニテハ未春也

忘トモ霜トモ立春の節より八日夜

とぐれ霜くる事は故ふ三月中四月節とのあつとすれ霜と云

草木

此部は三月一ヶ月の草木と集めのもの

花 古昔ハ梅小定る一枝開天下

皆春をど、詩は用とも梅のときり詩は多く桃李とて

花といふ○中世は梅の一枝花といふ○一説は和歌は花といふ

往昔より櫻の事といふ

櫻夢見草 夢見草△あさ草△吉野草△かき草△曙草 尋見草

中華にて此花を櫻木といふそのあさ草も楮林の類

ふして賞翫するものありあつど或は櫻桃を以てさくらいあつど

どと本草と考ふる小櫻桃は今のゆす梅さり朝鮮ふる此花を

と中古来聘の時此花諸方人多くあつて見てるの聘使の朝鮮

人等甚だこれを愛翫す海棠の異類ふしてり望土のたひ

の異類ふしてり望土のたひ

その花の美なる事本朝の外いた
るのなきと見へり此事唐又
にも能く知る宋景濂が詩
あり末に載と

○夫木 野外花 家隆

揚りうきふらあげんらうたりの
時りりのかく英むもうつらぬ

同 庭一櫻 仲正

かろくや約もかきぬふ紅さやの
危もせかさくうんさううか

詞白。文。咲。咲。ら。柳。ふ。○雲。花。ふ

花。雨。花。と。重。む。花。の。鳥。春。つ。か。ん。さ。い。梅

花。は。い。て。う。め。り。鳥。花。の。林。か。の。胡。蝶

花。未。づ。ふ。斗。り。雁。む。と。と。曉。む。の。う。さ。き。む

花。は。た。く。る。雁。む。と。と。曉。む。の。う。さ。き。む

花。は。た。く。る。雁。む。と。と。曉。む。の。う。さ。き。む

花。は。た。く。る。雁。む。と。と。曉。む。の。う。さ。き。む

花。は。た。く。る。雁。む。と。と。曉。む。の。う。さ。き。む

花。は。た。く。る。雁。む。と。と。曉。む。の。う。さ。き。む

花。は。た。く。る。雁。む。と。と。曉。む。の。う。さ。き。む

花。は。た。く。る。雁。む。と。と。曉。む。の。う。さ。き。む

花。は。た。く。る。雁。む。と。と。曉。む。の。う。さ。き。む

花。は。た。く。る。雁。む。と。と。曉。む。の。う。さ。き。む

花。は。た。く。る。雁。む。と。と。曉。む。の。う。さ。き。む

花。は。た。く。る。雁。む。と。と。曉。む。の。う。さ。き。む

花。は。た。く。る。雁。む。と。と。曉。む。の。う。さ。き。む

花。は。た。く。る。雁。む。と。と。曉。む。の。う。さ。き。む

花。は。た。く。る。雁。む。と。と。曉。む。の。う。さ。き。む

花。は。た。く。る。雁。む。と。と。曉。む。の。う。さ。き。む

花。は。た。く。る。雁。む。と。と。曉。む。の。う。さ。き。む

花。は。た。く。る。雁。む。と。と。曉。む。の。う。さ。き。む

花。は。た。く。る。雁。む。と。と。曉。む。の。う。さ。き。む

花。は。た。く。る。雁。む。と。と。曉。む。の。う。さ。き。む

花。は。た。く。る。雁。む。と。と。曉。む。の。う。さ。き。む

花。は。た。く。る。雁。む。と。と。曉。む。の。う。さ。き。む

花。は。た。く。る。雁。む。と。と。曉。む。の。う。さ。き。む

花。は。た。く。る。雁。む。と。と。曉。む。の。う。さ。き。む

花。は。た。く。る。雁。む。と。と。曉。む。の。う。さ。き。む

花。は。た。く。る。雁。む。と。と。曉。む。の。う。さ。き。む

花。は。た。く。る。雁。む。と。と。曉。む。の。う。さ。き。む

花。は。た。く。る。雁。む。と。と。曉。む。の。う。さ。き。む

花。は。た。く。る。雁。む。と。と。曉。む。の。う。さ。き。む

花。は。た。く。る。雁。む。と。と。曉。む。の。う。さ。き。む

花。は。た。く。る。雁。む。と。と。曉。む。の。う。さ。き。む

花。は。た。く。る。雁。む。と。と。曉。む。の。う。さ。き。む

花。は。た。く。る。雁。む。と。と。曉。む。の。う。さ。き。む

○非諧正花非正花大畧

○正花本植物春小成分三句去り

△花の波△花の浪△花の雪

△花吹雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

△花の雪△花の雪△花の雪

露骨の上と花とを思ふる鬼貫
 月夜の味や吸筒酒乃友立圃
 嬪ふも首飾まや花さうり移竹
 親者の伴ふあゝど花盛宗阿
 若狭山世上の花のさうの淡々
 (狂) 西方に遠去のまゝさとのへん
 花をていつもこちやいづか貞柳
 入ぬに櫻折、あともみおれて
 あさう梯を杖ふしてはあ長嘯子
 以上こころの花
 のかさう行風

詩 櫻之詞

明宋景濂

賞櫻日本盛於唐如被牡丹

兼海棠

日本ニテ櫻ヲ賞メ美スル一唐モオヨバズ

其ハナハタレキ一牡丹ニ海棠
 フソエタルガゴトシ唐ニハ一コト
 サクラナナキ故ナリ恐是趙昌所難畫

趙昌ハ画ノ上手ナレドモ春風絶

起雪吹香 白キサクラノ白ヒ

思ハルトナリ

詩 櫻五字對句

同上

名花経千歳

花白交梅樹

奇種聞五方

枝垂對柳絲

詩 同七字對句

詩礎

芳野寒光千里雪 第一花

嵐山春色九重雲 白櫻開

花如解語迎人笑 因花醉

草不知名隨意生 山着色

狀 催花見文 真字尺牘ナリ

春山百花 満開

修家清室之花只今盛

吟客成群 不失時以

そ花入る市賑く安

共暢 觴詠之懐

中不致内清修 戸夜休

同駕 怡々

るる立しと可為怡悦

尺牘 書啓上中下

春山 勝地勝境 芳嶺 百花 名花

催花 満開 爛熳 明眉 吟客 遊子

騷客 逸人 作群 雲集 奔湊 絡繹

不失時 未辭枝 不後時 共暢 云

侍吟筵 將野飲 同駕 催趣

行馳 携手 同歩 怡々 欣躍 歡趨

櫻田 吉野櫻の苗を植る夫

と櫻田といふ事

建保百首 光明峯寺

ふ凡の多吹おるとささる田の 苗代水を花とせれり

山櫻 山中小多一花白色單 辦也早く開く品類多

哥 家集 定朝

るあふと立かきまじりやも桜

花の志月くはそはらぬ

非 素のひまじみ清とち極其角

家櫻 人家小ある櫻といふ之

の月夜家流るの家極其 満水

非 さうふふさんくくさう立圃

庭櫻 新撰六帖 知家

をりせふ極極の咲とわらん

○以上三の櫻の名木かあはれ

家あり庭とあるとさうていふ

○次ふ記の名木。早二月の部有

八重櫻 昔南都の今有今之 處々有 哥 伊勢大補

いあへのまふの部の八重桜 なるたふふ白ひゆるる那

哥 文應百首

為家

うつらうつら神のまゝの八重桜
よの日のうらみあふらけりけり

犬櫻



木葉常の櫻は同
小花穂をす山彦

狂 約きて本は下陰い盗人の
用心もくらた大桜りか 貞宿

潤櫻

袖中抄云唐鞍の雲珠似
夫木 定家

そやしきふのさけさうがさう
くらぬのふささけさうがさう

樺櫻



花樺茶色之故不野々
又別々を本あり

是ハ檜物ニ多く用るりのあり
哥 新六帖 為家

擗らふ新の里のかを桜
花ふのさけさうがさう

遅櫻



色少紅く諸花ふ
後々青葉隠れ

咲、四月新樹ふと合と事あり
草菴 頓阿

あうとをさけさうがさう
あうとをさけさうがさう

連 ちれをふと合と事あり
非 ちれをふと合と事あり

烏帽子櫻

非 花ふはははは
帽子さうがさう

小櫻



花さす色密多うて
咲鑑の小櫻威と

よ物此花乃色ふかざうとく
非 小桜の花咲あや具足親重寛

伊勢櫻



花濃紫色小
赤一花瓣の

中の元白いせと名はるて説多
非 依保紀と妹系えいせ桜 重以

普賢象櫻



花千瓣
淡色と

帯の花中二の細葉出象鼻の
非 象鼻は似てさうがさうがさう

塩竈櫻

在 塩竈のさうがさう
桜刺さうがさう

緋櫻

小輪にて莖長く其葉甚だ赤し
新撰六帖 光俊

夕附日掃ふ雲や白くあらしん
る根よまろひざらうの花

揚貴妃櫻



重瓣はて
中輪あり

狂揚貴妃の花のうははほあく
天のやうなる桜の色なり 貞清親王

右の外 皇極櫻 江戸櫻 西行櫻
鹿尾櫻 淡黄櫻 雲井櫻 有明

櫻 滝櫻 委しく本篇博物
茎小名木并小花形くじくのと

花笠

花のさそとそせそ
似合ん人ハ彼 其角

花け雪

大伴のむさうむ
らん花の雪 全

花見酒

徳利ねんごり
や花あふこそ 全

右のつらきも花ふすそへうらり
委しくは三丁め の所あり

尋花

新千載 津守国助
はよふとらう知りあうら山

梯を瓜のてゆくぬ目そら
家集 泊舟尋花 西行

漕出てたうの沖みえまこせバ
まうこひりもさうねあうそ

花盛

徒然草に暮春の後七十
五日と期とひうら有

れも今甚早一口の二丁五
丁め小花盛の時をさす

永徳百首 為重
移ろそ花見る色よまろけか

あうの花の目殺るうらり
ま記わう人回さや花盛う桃室

波文
天和路の種をちくま花盛淡々

山や花垣根くの酒もや 亀洞
雪山

狂 春の扇乃風もやてい
今とさうは花見酒よは宗恒

落花

。山里深山を人稀き
處花の落さばびと懸云

家集

西行

木叶の心核のそすれり此の
花のふをぬとさびる春風

夫木 水辺落花 鎌倉五臣

楊花らうらひの心核のそすれり
おちる月夜乃かよれ川風

詞 ちる花さうら。花らる。同今余れぬ。
繁の心。冥は春風。春は雪。花乃稀。

入相。浪の心。波らうら。ちる。おちる。
傍ら。ちる。おちる。おちる。おちる。

花をぬれ。ちる。おちる。おちる。おちる。
文書。あさる。稀な。花。吹は。ける。要。花。花。

心は。ちる。おちる。おちる。おちる。おちる。
連。ちる。おちる。おちる。おちる。おちる。

非。花。心。を。追。ひ。て。ち。る。お。ち。る。お。ち。る。
ちる。おちる。おちる。おちる。おちる。おちる。

狂。楊。花。ら。う。ら。ひ。の。心。核。の。そ。す。れ。り。
名。花。の。華。に。波。を。か。よ。さ。る。忠。清

落花之詞

唐 雍陶

勿怪頻過有酒家多情長是惜

年華 夕ヒク酒店ヘユクヲアヤシレナ

春風堪賞還堪恨 春風ヲ賞美

花 昨即ノ開花ケフハ落花トナルヲ

今日ハ老衰トナル世ソカシ

詩

明 丘雲霄

昨日看花花滿枝今朝爛熳點

清池 昨日ハ花枝ニ滿テ有シ分夜

浮ヘ 無情莫抱東風恨作意開

時是謝時 花ノチルモ無情ノ至リ

詩 落花五字對句

煙銷垂柳弱 待月水流急

風卷落花輕 在ニキテラククハカロシ 惜花風起頻 ヨシハナラオソツテ

細柳擁壇人迹絶 キレケリテ人カケミ 落照春 ラクキウハル

落花沉澗水流香 ラククハレンミテタニスイリウカク 且落花 ニタラククハ

落花寂々啼山鳥 ラククハニヤククトメナクヤニトリ 覆地多 オホクテチララク

楊柳青青渡水人 ヤウリウゼンクトノワタルミツラヒト 踏落花 フムラククハラ

惜花 シヨクハ 花小對之命小 ハナコタヱノイノメコ

後拾 ノチヒク 能宣 ノトメ

夫木 ツキ 雅經 ヤノキ

詞 コト 根 ネ 折花 セハナ 狂 キヤウ 狂 キヤウ 狂 キヤウ

詞 コト 根 ネ 折花 セハナ 狂 キヤウ 狂 キヤウ 狂 キヤウ

詞 コト 根 ネ 折花 セハナ 狂 キヤウ 狂 キヤウ 狂 キヤウ

詞 コト 根 ネ 折花 セハナ 狂 キヤウ 狂 キヤウ 狂 キヤウ

詞 コト 根 ネ 折花 セハナ 狂 キヤウ 狂 キヤウ 狂 キヤウ

詞 コト 根 ネ 折花 セハナ 狂 キヤウ 狂 キヤウ 狂 キヤウ

詞 コト 根 ネ 折花 セハナ 狂 キヤウ 狂 キヤウ 狂 キヤウ

詞 コト 根 ネ 折花 セハナ 狂 キヤウ 狂 キヤウ 狂 キヤウ

詞 コト 根 ネ 折花 セハナ 狂 キヤウ 狂 キヤウ 狂 キヤウ

詞 コト 根 ネ 折花 セハナ 狂 キヤウ 狂 キヤウ 狂 キヤウ

詞 コト 根 ネ 折花 セハナ 狂 キヤウ 狂 キヤウ 狂 キヤウ

詞 コト 根 ネ 折花 セハナ 狂 キヤウ 狂 キヤウ 狂 キヤウ

詞 コト 根 ネ 折花 セハナ 狂 キヤウ 狂 キヤウ 狂 キヤウ

詞 コト 根 ネ 折花 セハナ 狂 キヤウ 狂 キヤウ 狂 キヤウ

詞 コト 根 ネ 折花 セハナ 狂 キヤウ 狂 キヤウ 狂 キヤウ

詞 コト 根 ネ 折花 セハナ 狂 キヤウ 狂 キヤウ 狂 キヤウ

詞 コト 根 ネ 折花 セハナ 狂 キヤウ 狂 キヤウ 狂 キヤウ

詞 コト 根 ネ 折花 セハナ 狂 キヤウ 狂 キヤウ 狂 キヤウ

詞 コト 根 ネ 折花 セハナ 狂 キヤウ 狂 キヤウ 狂 キヤウ

詞 コト 根 ネ 折花 セハナ 狂 キヤウ 狂 キヤウ 狂 キヤウ

詞 コト 根 ネ 折花 セハナ 狂 キヤウ 狂 キヤウ 狂 キヤウ

桃ノ風雪ヲ見テ春ノ去ラテ惜メバ愁浅カラズ

残花

春のつら残る花とていふ
夫木 入道太政大臣

△名残の花△青葉乃花
梢小のこる。凡より後たづひるる

△かゝるゝ△移ふまゐる花
花仙の唐小もえい

詩 殘花之詞

唐 崔惠童

一月主人笑幾回相逢相值且

街杯主人家ニ在リテ笑ニ樂シム

ヤウニ偶茶會シタ時話コト一月ノ中何ホドカアルカ

色如流水今日殘花昨日開リテウサヲ忘レ酒ヲ吞レヨ眼看春

ノウツリカハルハ水ノ流レテトビ

ルノオキガゴトク昨日ノ花サカリ

ハ今日ハヤ落チル然レバ酒ヲノ

ミタノレムテスゴサレヨイイワ

詩 殘花五字對句

枝上三分落 山齋鳴過雨

園中一寸深 澗對落殘花

詩 同七字對句

詩 礎

好鳥鳴春歌後院 看殘花

飛花送酒舞前筵 眼偏明

短砌雨餘芳艸合 照殘花

小亭颯旋落花疎 色猶深

海棠

海外々々來る花ゆへ海棠と名づく

非 海棠の花のうらやむる月其角

酒棠や蝶ハ舞交月トニ紅

詩 海棠之詞

明 張新

雨滋霞靨入朱顏 蒼ノ色香ヲ

ニタトヘタリ 月下疑後姑射

還ル月カゲニナガムルハ姑射コウシャ最トモ

是春ハルノ工多巧思コウシ著將色シキ在淺深シヤンシン

間マ春ノ造化ノタクニ種々ノ妙アリテハ浅深ノ色アリ

詩シ海棠五字對句 同上

蜀彩シキ淡搖拽タンヤウズエ弱質ジュクシツ不禁露フキニキツ

吳粧ウシュウ低怨思テイエンシ幽懷ユウカイ欲訴風ヨクソフウ

詩シ今七字對句 詩礎

望中バウチュウ落日青絲騎ラクジキ箔外風ハクガイカゼ

夢裏ムリト東風瓊樹枝トウフウケイジュシ舞蝶飛マテウトブ

海棠クハナクサ花中仙ハナナカノセン王禹孫ウウソン花譜ハナコト

花中ハナナカ仙ノセン王禹孫ウウソン花譜ハナコト

生ナマ恨カミルルナナレレ但タ恨カミメメレレキキココト

五ツアリ一ニハハ鱗魚リンギョ餅ヒナキモノ

ナレレ骨ボネ多タシシニニハハ金橋キンキョウモヨ

キモノナレレ花ハ酸クサキキヲヲ疵キズトトスス三三ニ

ハハ萼菜ハクサイ賞シヨウ詠エイナルモナルモノナレレドモ

性冷セイレイナリナリ四ニハシニハ海棠トウカウ美花ミハナナレ

ドモ香ニホヒナヒナキキヲヲ如何イカニ五ニハ

我ガカカ嬌ヒメ子コ詩シヲヲ作ツクルル能スハハサル

コノ五ノ事コノイハレ吾ガ恨ミトイヘリ

睡花スミハナ唐タウノ玄宗皇帝大真妃テイシヤウテンテウダイマキヒメ

来キテ姿セガタ見ミ玉タマハハ海棠トウカウノ睡スミヲヲ来キテ

白輪ハクリン海棠花トウカウハナ白ハク

桃花トウカ三千代草ミチヨウノクサ御酒ミカヅ古草コクサ藏クラ

異イ名ナ姐イモ挑トウ助スケ嬌ヒメ

異イ名ナ仙セン木キ蟠パン挑トウ引ヒキ客キヤク毛モウ挑トウ花ハナ

異イ名ナ三サン倫リン五イ渡ト阿ア陽ヤウ花ハナ碧ヒキ桃トウ招サウ挑トウ柳リウ即キョク花ハナ陌マク上ジョウ花ハナ桃トウ林リン

◎夫木遙見桃花

俊頼

唯々又々そあがらん山が川の
そのへ乃桃の花のそをを

◎藏王 三千代草

夕べの酒ふうのひんや
三ふとのまねまよひふらん

詞春風。うけい。ええ。まは。盆。団
生の桃。ニ。千。代。夕。日。こ。そ。わ。は。あ。

き。鞍。る。山。天。の。川。ま。日。碎。果。垣
游。は。留。糸。二。百。の。糸。は。や。の。新。造。

唐古孫。枝。う。り。也。遠。山。霞
連。花。今。日。且。開。く。り。り。雲。の。桃

未。芽。世。は。や。う。が。の。雲。桃。紹。巴
開。花。桃。上。桃。や。香。露。枝。枝。桃。其。角

桃。小。木。て。ま。ま。そ。ま。る。心。移。竹
詩 桃之詞 唐李嶠

獨有成蹊處 穠華發井傍
清。水。桃。華。ア。リ。人。ヲ。不。召。ト。イ。ヘ。ト。モ。人
花。ヲ。慕。フ。テ。来。リ。自。ラ。蹊。テ。キ。ル

山風凝笑臉 朝露涼啼粧
桃。花。ハ。美

人ニ似タリ風ニ逆ハハ笑フ如ク
隱士

顔應改仙人路漸長
隱者モ桃花
ヲ見レハ顔

林苑千歳奉君王
宮中ノ桃花ヲ
以テ天子ノ壽

詩 今 唐白敏中

千朶穠芳倚樹斜 一枝枝綴乱

紅霞 桃樹ノ千朶斜ニノビテ花
紅霞ノ如シ

霞ノ如シ 憑君莫厭臨風看
占

斷春光 是此花 春風ニ乘ノ桃
花ヲ見レバ厭

詩 桃五字對句

種竹交加翠 松葉疎開徑

植桃爛熳紅 桃花密映津

詩 同七字對句 詩礎

桃花氣暖眼自醉種桃年

春渚日落夢相牽深淺粧

五夜漏聲催曉箭紅欲然

九重春色醉仙桃滿澗香

桃 漢書二載武帝時一足青

鳥來リテ帝ノ前ニ止ル東方

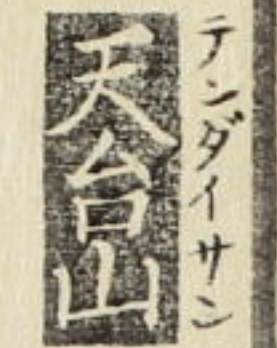
王母來リテ桃ヲ奉ル此桃

三千年ニ一度實ノル仙家ノ

豎子此桃ヲ三度偷ミ食ヘ

ニ東方朔ハ九千歳ト云ヒ習セリ桃

桃之



漢ノ代ニ劉阮ト云者天台山ニ入

テ茶ヲ採ル路ニフミヨヒテ

尺ハ取ラントシノ水ノ深サ四

一ツノ山ヲ越ケル時二人ノ女

ヲ見ル容顏極メテ妙ナルガ

劉阮ガ姓名ヲ呼ビカケル

テ下地ヨリ相識レルゴトシ

或時桃ノ花ヲ詠メテ

或ル大家ニ男女有テ彼ノ

漁父ニ食ヲ與ヘ馳走シテ

クルツレヨリテ世間ニ出子



武陵ト云所ニ魚

ヲ捕ル漁夫ア

云フ我等ハ秦ノ世ノ乱ヲ

避ケテ妻子ヲツレテ爰ニカ

ク年數モ覺ヘズサルホドニツ

レヨリ何代ヲ疑タルゾト問
 フ秦ヨリ魏ニ移リ晋ニ代
 リテ選カニ年代久シキコト
 ナレバ漁者モ大ニ心アヤシミ
 帰リテ此由ヲ太守へ申上
 ルニツキ太守ヨリ漁者ニ入
 ヲツヘテカノ前ノ大家ノア
 リシトコロヘユキ再ビ尋子サ
 セラレケレドモ其アルトコロヲ
 知ラズ尋テ路ニフミマヨヒ
 辛フシテ空シ

女都観

クカヘリシト有
 刘禹錫ガ詩アリテ玄都観
 ニ桃千樹栽シトイヘリ

桃源平志 桃白小	品赤とび入 輪らぐみ	残雪桃白 八重大輪	白き 是木兆	早咲 ふれて	緋桃 八重
-------------	---------------	--------------	-----------	-----------	----------

詩 緋桃之詞

短墙荒圃四無隣
 烈火緋桃照地春

古城ノ荒圃野中ニア
 桃谷赤色火ノ烈ガ

坐久好風休掩袂
 夜来微雨已沾巾

桃葉受風美人ノ袂
 似夕リ夜来雨降

敢同俗態期青眼
 似有微詞動絳唇

桃花ノ礼容
 世俗ノ如ク

盡日更無人
 唇ニ似タリ

見秦人終日
 見テ

必見秦人終日
 見テ

李花

異名 東苑 道傍
 和名 ひめぎさ花

新撰帖

為家

庭下陰山
 吟風もそよ

る後さかると。雪くを見え

詩 李之詞

唐太宗

玉衡流桂園成蹊正可尋日夜

谷道ノワケウ 鶯啼密葉外蝶戲カケ

晩花心鶯ハ葉ガクレニナキ

李徑獨來教愁情相與懸李巷

道ヲイク度モメグリテ自明無

月夜強笑欲風天ヤミナレドモ

減粉與園擘分香沾渚蓮徐

妃久已嫁猶自玉為鈿美人ニ

詩 李五字對句 同上

園裡送明月葉暗青房脫

林頭宿白雲花明玉井春

詩 李七字對句 詩破

近紅暮看失燕脂自無言

遠白霄明雪色奇李花香

石筍街中却歸去花落時

果園坊裡為求采白玉堆

揚梅花花の早く花咲葉

実のさず松のこころ木立のびゆるさず實も酸

○実の大いさるやど味もひもよりさるび植癒

李昇花新撰六帖 衣笠内大臣

家園中ぬるりの花

詞 白のそをのぬる。白ひ初る

よのが名をぬる。中ぬるぬる

非 あまのりつりあふいどみわたのそ貞穂

詩 杏之詞

唐温憲

團雪上晴梢紅明映碧空 白雪

ノ梢ニカ、リ 杏苞 店香風起夜

ノ色天ニ映ス 夜風吹テ店カシバシ

夜風ニナツテ雨ヤミ今朝ニ 村白雨今朝

至テ見レハ一村雪ト成レリ 静落

猶和蒂繁開正蔽條 夜雪杏

テ花蒂ニ並ビ恰モ杏花ノ 樹ニ降

繁ク開テ條ヲ蔽フカ如シ 淡然間

賞久無以那嬌饒 静ニ居テ杏

賞玩スレ庄飽キ足ルニテハナシ 雪ノ景ヲ

詩 全 薛能

手中移得近青樓 枝ヲ折テ置

活色生香第一流 杏花ノ色白ク

誰知艷性終相負 ニホヒモ第一

不休 杏花美ナリトイヘ庄嬌ニ近

暖酷松葉嬾 晩色連荒轍

寒粥杏花香 低陰覆樹碑

詩 杏七字對句 詩礎

忽憶華時頻銘酌 杏間遙

却尋醉處重徘徊 湿胭脂

寂々孤鶯啼杏園 獨含晴

寥々一犬吠桃源 已續翻

杏之 故事 碎錦坊 斐晋公午橋ト云

株ヲ植テ碎錦坊ト名ヅク 葡萄花

林檎花 名 櫻 文林郎 棗花 大小二種あり

梨花

異名 清艶 凝妝 玉露
種類 棠梨花 野山に生る

浦梨の花 浦とて伊勢の名所ありて
妻はの花 卅丁三秋の

夫木

為家

少くもる侍とてこれさあ
枝みわらわら山梨のりる

詞 秘 へ えきぬ 百は白のな
色ま け花 彩の妻さ ありき

生ぬ まし 妻さし 梨壺 去
ろ花をば 風かみ 咲そん 志る

連 雨や及けゆるの 朔あつ 月相
非 梨は花をぬきて ぬるる 嵐式

梨の花うら 尼は念佛まて 言水
あつたのまて 梨は花をぬき 鬼貫

梨花之詞

劉商

露 晞 行 春 向 若 耶 野 人 懷 惠 欲

移家 若耶公儀御用ノ梨多シ
官人春行テ梨花ノ豊年

ヲ見ル民家尤ウルヲヘリ近辺ノ野
人其恩惠ヲ思フテ家ヲ移シテ

来ント 東風二月淮陰郡唯見棠

李一樹花 淮陰ノ辺ハ古ヨリ梨樹
多シナアル家ハ大名

云傳ヘリ

詩 全

丘為

冷艶全欺雪餘香 入衣 梨花
白ク

ウルハシキ 白雪ヲ欺テホコルニ似タ
リ其香氣餘分ニ多シテ人ノ衣

服ニラ 春風且無定吹向玉階

飛 梨花ガ春風ニ吹カレテ玉階ニ
向フテ飛ブト云フヲ以テ新臣

魚功ニノ恩惠ヲ蒙リ
天子ニ近クト云ニ喻テ云フ

木瓜花

非 木瓜あざみ 山店

狂 狂なる者 木瓜のさくら
花やそとみまのさくらと蝶鼓

木蓮花

非 けいん 尼の好や
木蓮花 木蓮花 栴井

胡桃花 夫木 花のしきぎけこ
くるものそ先をひを

救多つこの救
とがさあろ 知家

辛夷 木筆 迎春 侯桃
紫菀 紅燭

△西寺と娘。別ふ重花咲あり形
幣のし故ふあてと云 金三

△素 才ふて 風掃くころの承
かせをさそさげくころか為家

俳 素夷うれ本はむとさう文舟
蝶々やと舞はれふの舞市隠

詩 辛夷之詞 崔迪

緑堤春艸合王孫自留玩 春ノ

クサラツムトテレキク 況有辛夷花
ノ人々アソビニ出ラル

時 興芙蓉乱 サカリニテ水ノ

ヲモノハスノ花トヒトツニミダレアイ
タルケシキヒトレホヲモレロク魚ア
リトナリコラレノ花ハ
ハスノ花ニヨク似タリ

躑躅 山石 羊躑躅
家集 躑躅為山光 西行

はらうく山のいろひゆみそえて
とくうらまもの名のこまきけり

詞 紅る。とぞ先の色。咲白つど。

はらうく 海辺 さいのうら 鳥
よら 岩 雲つら。雲根のほら。山

路のつら 野 松の中つら。 采人
妻本 ぬ 駒 はなはけい 田のこ

夕月をこれ。衣のぬええまきう 山
娘の神上はくどが 萩 涼山つら。

小つら。ゆらつら。あつらつら。
だんのほくど。雲はくど。

連 ちみか下りあちとま 雲つら 宗因

俳 小春居い 糸糸の針のつら 山其角
まに 拵を 授て 又 拵ル 拵ル 丹解

狂 笑花の教い上戸のつら 海まきう
名い下さ乃すくめらつら 未得
詩 宣城見杜鵑花 李白

蜀國曾聞子規鳥子規一名ハ杜鵑和名ホト

ギス唐ニテハ三宣城還見杜鵑杜鵑鳥ノ啼ヲ聞テモノサビシク思フニ又杜鵑花ヲ見ルニモ古郷

ヲ思ハタタ一呼一回腸一断鳥マ花

出スハタタ一呼一回腸一断鳥マ花

三月憶三巴三春一テ三月ニナレ

此所ヨリ三巴ガ見ユレハイヨク古御ヲ思フ

詩 杜鵑花之詞 張籍

五渡溪頭躑躅紅タニホトリニ

花サスウヤ嵩陽寺裡講時鐘山寺ノ

ケリカ子キコヘル山中春山處々行應レツカナルテイニ

好一月看花到幾峰春ノ山路

往ニ花見事ニアルベレ一月ノ内毎日花ヲ見アルカバ幾ツノ峯ニカ到ラント

オモヒヤリタルナリ

躑躅能姪坊も歌

品類 姪くや姫のじ一貫

羊躑躅 吉野ニ多ク遠く見き蓮花の如

花黄 哥よの岩つと光俊

我翁の谷むらさつと

映山紅 葉少一花赤

花と開くと尤き

或ハ白花の物あり赤花の

豊映 白雪ミり

山紅 中アん〇ヤー

白く丸ーあつまり咲く〇せ

いいと赤小輪〇みいれ狸

紅いれ咲〇江戸万葉八重う

すいろ大アん〇ハッちり燃大

アん〇はつろがひさす

あかしー小ろんさがる

〇峯の松風 〇雲井赤

白紫び入り 八重大アん

○櫻川。さくら川。中。○花車。むら

さ。大。えん。ま。れ。咲。○志。や。む。ろ。白。む。く。さ。れ。飛。入。さ。さ。大。えん

藤 あけ 紫藤。さくら藤。さくら藤。花。松見草。二季草。

哥 家集。橋上藤花。頭季。

う。す。く。く。の。さ。く。白。く。あ。い。ま。ま。と。れ。め。ろ。く。い。わ。く。る。あ。ふ。ま。

貞徳百首 藤花始綻 為家

初。ま。の。か。み。ふ。く。は。ふ。ち。あ。い。の。さ。え。ま。ま。の。う。え。ま。ま。の。う。え。ま。ま。の。う。え。ま。ま。

詞 ぶ。び。く。ち。る。は。白。く。く。れ。

浦。回。子。た。く。た。た。は。く。の。あ。ま。り。

白。く。池。の。あ。ま。り。秋。つ。つ。は。あ。ま。り。

庭。ふ。も。も。の。野。春。日。輝。ふ。ら。あ。ま。り。

松。の。も。も。の。あ。ま。り。春。日。輝。ふ。ら。あ。ま。り。

松。風。由。縁。ゆ。り。は。な。さ。れ。あ。ま。り。

の。さ。く。さ。く。あ。ま。り。山。み。よ。の。さ。く。さ。く。あ。ま。り。

の。さ。く。さ。く。あ。ま。り。山。み。よ。の。さ。く。さ。く。あ。ま。り。

本。あ。ま。り。雲。の。ま。た。池。の。あ。ま。り。

か。く。あ。ま。り。あ。ま。り。あ。ま。り。あ。ま。り。

連。あ。ま。り。あ。ま。り。あ。ま。り。あ。ま。り。

非。白。あ。ま。り。あ。ま。り。あ。ま。り。あ。ま。り。

長。く。し。の。あ。ま。り。あ。ま。り。あ。ま。り。

白。あ。ま。り。あ。ま。り。あ。ま。り。あ。ま。り。

狂。紫。の。あ。ま。り。あ。ま。り。あ。ま。り。

松。の。あ。ま。り。あ。ま。り。あ。ま。り。あ。ま。り。

詩 紫藤之詞 許渾

綠。蔓。濃。陰。紫。袖。低。客。來。留。坐。

小。堂。西。色。ノ。振。袖。ノ。如。シ。見。物。ノ。客。

來。リ。番。ノ。醉。中。掩。瑟。無。人。會。家。

近。江。南。畫。溪。小。堂。ノ。西。ニ。ハ。客。來。

不。來。我。小。堂。ノ。中。ニ。テ。瑟。ヲ。ヒ。キ。テ。

夕。ノ。シ。メ。リ。且。堂。中。ノ。景。色。ハ。江。南。ノ。

美溪ウツリテヨシ

詩 藤花五字對句

野衣裁薜荔 松石倚空古

山酒醉藤花 藤花不計年

詩 七七字對句

詩 礎

長蔓纏來山徑樹 碧侵衣

無花拂盡石橋苔 花無枝

仙人碁局埋幽艸 留美人

閑士禪扉閉古藤 院隔橋

妙術 藤の花長く見事小開法

藤の根へ酒をくけ或ひ酒の糟を入るへ藤能くや花

長く美しく咲たり扱花咲て後英の下へ盃小酒を入三寸程

のいごとあけて次第の盃をさちちりり花長く見事咲

月季花 日月紅 不断た

より長春の名あり然まどを春りとも花多し殊小春と

詩 月季花之詞 宋 韓琦

牡丹殊絶委春风 籬菊蕭疎

此花榮艷足四時 常放淺深紅

牡丹ト菊トハ美ナリトイヘトモ月季花ノ四季ニ咲テモイロクレナイ

櫻長春 木ハセウヒ花ハ八重

以赤 七白長春 一重赤内赤

石楠花 唐人の詩にもあり 葉はらんぼうげ母

似たり 詞 鹿山 分合峯 小峯

飯山 篠分る乃山人 大峯 役の

仙のくつものれうみそまへまのり

非 山系なきこそすれ楠を頼高

沉丁香 瑞香 春是とて木 睡香 似て能活と

高三三四尺花丁香の如くありて

紫既小開けバ淡紫となく

非 山系なきこそすれ楠を頼高

狂竹垣を産のさぬおやんそ

白ひをとむる

山吹 順の和名 抄小款冬

この字と書く朗詠集に公任

郷も此字を用ひ給ふ本朝小

いこれよちさぐふさみや本草と

以て見る時ハ款冬いふこの茎

の事ハ正字ハ棟棠 異名 酴 醴花 玉蕊 銀葩 春 紀念草 鏡

草面影草○菊の花ハ黄色と

本色く山吹の花ハ白と正

色と寸良峯の宗貞ハ山吹乃

たふ衣衣くやたれととまてを

くらひくはして此哥もろれを

とあり又いさつさきの法代さ

つんと赤さる強奥山よこぐの

花咲此歌にうて山吹をよ

み合さたる黄色の事なり

枝くちとそた山吹さむらりて

ここのあふはそまへたる

詞 咲ちた 公 色いそあ色はま

は食川岸の山吹 歌うつる志川枝

をあらは波ふらうやく 井の川流

流津敷の玉ちかかふる 流津岩

れ後池の心夜池の岩根れや

里里れ山吹いそた里 井の川流

露くくくあせくう 山吹の志け

のはゆ 最ふれ 玉とむる 露の

○ほろろ。金ごびれたごびりる

○ほろろ。恒庭蛙あはれ。まあはれ

○ほろろ。花の素潔はな。其角

○ほろろ。八重はち。まあはれ

○ほろろ。藤原秀直ふじ。小采花せうさい

○ほろろ。狂きやう。その本の根こん

○ほろろ。小采の花せうさい。未得

○ほろろ。五味子ごみじ。玄げん。哥か。玉たま

○ほろろ。新撰六帖しんせん。世よ。てて。いい。よよ。の

○ほろろ。朱通花しゆつう。通草つうそう。蔓草まんそう

天南星てんなんせい。花白紫の
両品あり



冷法れいぽう。藤の若葉わかしら。事こと。い

凶年きうねん。飯いひ。まま。ぜぜ。てて。くく。みみ。大だい

春蘭花しゅんらん。獨脚蘭どくかくらん。野

道灌草だいかんそう。木藍子もらんし。愷かい。見けん。

この葉このは。ごご。くく。うう。すす。みみ。ごご

三月さんげつ。藤ふじ。まま。でで。このこの。ごご。くく。花はな

とと。ろろ。ふふ。及およ。んん。てて。房ふさ。大だい。きき。く

とと。様やま。てて。薬やく。いい。もも。用もち。ひひ。故ゆゑ。一ひと。名な。とと。おお

春菊しゅんきく。苜蒿もくこう。高麗菊こうらいきく。秋あき。小こ。もも。同どう

淫羊藿やまどりくわく。仙靈脾せんれいひ。放はな。杖じやう。草そう

花白紫はなしろむらさき。兩品りゆうひん。有あ

内うち。丸まる。ああ。りり。くく。もも。出で。てて。きき

清せい。繁はん

東菊 花菊小似て 梅花 淡紫色

櫻草 種類数多あり  鞍馬さくら草

濃紫白油源 濃紫 旌節草 九輪草

氏薄紫 少いろ 海老根 化偷州

大紅白紫あり 山宇波良

荒世伊登宇花 花こころ

丁子草花 葉柳小似て花丁子のごく浅葱色

仙臺萩 萩小似て花黄之 首宿 草大和本草小

華鬘草 花形クニと化  るる小似たり

碎米薺 蓮華花五形ともかく 俗小△ひんぎ花といふ

母子草 鼠麴 米麴 鼠耳 茸母 黄蒿 香茅

無心草 佛耳草 能なるびさる

妙術 治痰嗽術 母子草花 を採てなごの代か用ひ妙く

小粉團花 花の形粉團花小等

馬酔木花 三叉圖会云能繁茂と 高さの二三丈山谷

蘇枋花 紫荊花の赤色と染る木といふ

荷化紫艸 根とそれの葉

白茅 茅花の形白又と接ぎ列

哥 漸乃のろろまはれつる後て うるひ子もがらほりいせん知家

詞 けのうづつと流る。わさゆ。あはせ
能 送ひ子ののをち極て後かたり青玩

茨花 雞頭。雁頭。水落。葉
大花紫あり

馬蘭 葉長三尺幅三分花六
瓣淡紫色小あな紫似る

眉作花 薊△鬼あさこ。花乃
形し眉拂ふ似る故

名づく一説は鬼筋とす
能 遠心も二折へても保東起

○花はみふ薊大薊の三種ゆ大薊は
鬼冷みとも俗小鬼の眉拂ともいふ

又古書は美人艸の事ともいふも如
何とにも三片美人艸の事四胃出

海金沙 かなばさ。あまづ。いづ。
もあづ。大和そ三味

線 宿根より生る
あづ草より莖甚とつ

堇 若堇 苦葵 俗小相模草
よ花ひきされいり

⑤ 堀川百首

公實

ひうへいひいひは極あはれふり
はさまきどりのとまきのし

連 つらせすはあはれさし月相
非 ねむりぬ娘の極すははれさし涼帝

甲 乙をさしはあはれさし堇如氷
狂 うめいひさるは花をいさるん

茶師の意乃はなすははれさし赤富

金盞花 長春菊 花金紅色
大指頭の如形等被

槿檀花 木李 木梨 花五弁
淡紅色外國の花欄

黄精花 葉竹小似て尖ら花青
白色実の白して黍粒の如

三月大根 楊花蘆服。春日
葉と食ふ花淡紫

櫻桃 花梅のさく少くして白
葉山く尖り毛あり

梅若葉 新進 秦椒若葉
葉のさく葉

菑苴

菑苴荷△若荷

三月菜

春時葉を食ふ

若菰

菰の葉部 希食 冷毒 即堅

胡蔥

非あつてもそのつひ

櫻海苔

非花味小嵐やとる

茶摘

茶を採の時分早き時の味全う遅き神散ず

穀雨の前五日を以て上と後五日これ小次再五日又これ小次

終夜露ふぬまでと上と日中にくる依下と雨中にくる

春雨集 曇るる雨降るぬる

梅尾のまらるる

手始

茶つま

綿時

八十八夜と五六日見か

八十八夜と過てやうてまく

を下時とすそれより段々

勝手次第小時なり一月も早

までもまくおそくえりさう

てもすすは○白花のか

種植

此月種を蒔べきもの

黍 薏苡 烏芋 豇豆 黑豆 豌豆

菜豆 扁豆 赤豆 刀豆 胡麻 薑 眉豆 黍 石竹 地黄 草

麻子 荊芥 香薷 茵 胡蘆

菊 此月菊を飯りよみち 肥つら 移栽

仙蓼 芭蕉 秋海棠 芋 大角豆

橘 冬青 木樨 椿 是ら此月

接木 杠橘 柑柚 香櫞 等清

明の前後小はぎては

生類

三月一ヶ月の諸の

生類をあるす

呼子鳥

古今三鳥のいみ

わいなど深山は鳴て物ま

き鳥と心得てよむべし古今

の哥はよりておほつらま

呼といふもよみつらま

夫木 赤入

戒せことちしひの山は

若よびくせ夜はあひね

日 曉呼子鳥 左京大夫

夜とのこは後をあらんをよ

人もさへえぬ志のせりそ

麥鶉 非居雨のぬま

引

残る鶴 二月小引さくは鶴乃

此月まで残り居る

雲小入鳥 鳥沖雲とも云

鳥帰も同ド

事より鶴雁鴨及びびり

くの鳥の古巢は端に去の

心たり天津雁といつらも

あり雲は入鳥の奇連非

三月盡古巢へ帰る心と結

津守國基

落葉はかくまふことと

くまふこととあか

能名の雀は入たり不

音

和朝小は渡り鳥

背

小紫赤と交る羽あり

鶉

鶉

鶉

鶉

ちの前の白きもん丸を毛けり
 ありた所あり南方の國にあり
 東南へとびて北西へいとむさろり
 その声やこくくあくゆへ名付と
 けり寒氣と嫌ふ鳥よて日行
 方へくと向ふとく霜露を長
 びるも朝の日出る内と夕暮
 がこよひ出ると稀きりくぬく

夜分ふる時樹の葉を背上り
 覆へて飛上り雀豹が古今注見あり

① 非 志やこふは志あてふあや白飛

② 鶇鳩之詞 鄭谷

暖燄 鶇鳩之詞 鶇鳩ハ寒ヲ
 キラフ鳥ニ

テ暖ナル日野辺ニタハフレ翼ノ
 ウツクシキコト錦ノゴトシト品

流應得近山 鶏シヤコノ風流ウ
 ツクシクシテ山

鶏ノスガタ 雨昏青州湖邊過フ
 ニチカシ

ラントスルトキハ青草湖ト云フミツ
 ウミノ辺ヲ飛スギテ寒ヲサケルニ

花落黃陵廟裏啼 三月ノ末ニ廟
 ノ裏ニテナク

コレ春ノ終ルシルシナリ黃陵
 ト出スハ青草ノ對ニスルツ 遊子

乍聞征袖濕 佳人纔唱翠眉低

鄭谷征役ヲ蒙リテ旅遊ノ身
 ナレバ鶇鳩ノ啼ヲ聞テ古郷ヲ

思ヒカナシニミナニダ衣ヲウルホセリ
 美人ノ哥モ自然ト眉ヲヒソメテ

モノカナシ 相呼相喚 湘江曲苦
 キテイナリ

竹叢深春日西 湖水ノホトリ竹
 ヤブノ内ニテユフ

日ノコロ啼キサケブヲキケ
 バイヨクモノカナシキトシ

① 給 今月食用可シ△蛤もどつら
 海辺にて取事といふとつら

② 春 今そむろ二元のうらの蛤瓜
 貝あはせとそむろふりり西行

③ 非 雀いもろぞ素名はけつ其有
 ④ 丹波山が栗いよ秋のあはせど

⑤ 後者浦の春の 櫻貝 非 山後や
 くらぐり 淨久

⑥ くらぐり 櫻成 川魚 櫻魚
 貝長吉

⑦ くらぐり 櫻成 川魚 櫻魚
 貝長吉

⑧ くらぐり 櫻成 川魚 櫻魚
 貝長吉

非筑波くまかろ 櫻鯛 櫻鯛

素橋 朝花のふるりやも柳の

狂一のけぬのは音ひ秋のあまごど

柳鮓 形柳葉似方故名つく又

柳鯨 俗牛の言 若鮓 鱈

新六 山川のそらけ本法のかまふ

青饅 餅 餅

上梁 梁の奥と取具へ上り梁の

夫木 せのりつ田上川のせりや

必用 此間三月月必用

破軍 夜九ツ 夜八ツ 夜七ツ

方 朝六ツ 朝五ツ 昼四ツ

向 酉の方 戌の方 亥の方

子の方 丑の方 寅の方

時刻 万事知の日知の刻と

出行作事 北の方

樂事 山野の

天氣 日和を見る小西北の方

西北の山の根を死する時ハ雨

ふげた人山かひても西北の雲

東南へ行日和晴ても曇りても南風吹出せば雨とあり○南風或は東南より大風吹出せば曇らむとて頃て雨とあり○暴水出まひ今年中風雨多し是と挑花木と云○暖ふる冬と比寒まら雨ふらふ

占候 日蝕あり大水と毒の甲寅甲申乙卯己丑辛寅壬巳以上の日以雨ふれば米價貴し○辰の日雨ふれば百虫生じ

○上半月雨ふれば**養生** 此月魚多く捕まらるる

臟氣伏し火壯水死 醜と食し肝の臟と助くと發泄し依いむ西北の風ふらふべし湿地小居る

治中暑 今日辰の日縮の袋ほうごんの粉を合せて風のよく所は掛け置と夏暑氣ふあつる時水はやくのて服とふり即ち治と

三月飲食 料理献立

物小蒜 雞卵 鳥獸の五臟を
べう熱病好 今月中ハ甘と物を食と可す

料理汁
マコギ かん 山椒
ごぼう とうもろこし 大根

清汁
すのこ 大根 しょうが

塩がき すすきの ちりめん 大根

鱈 赤貝 大こん 白が 大こん

ここのめゆ まるごつね くら

たて せうが くら

まて 葉せうが 生さつら 葉せうが

差味 せいり酒 かいせ 海苔

蓋屋 菊の實 蘭のおひひを
とり去るべし **辟鼠術** かのへ午

の日鼠の尾を斬て血をとり
屋梁にぬれし永く鼠来らず

妙術 **辟井邊百虫法** 夜
分雞鳴く時黍を炊

と其釜の湯を以て飯を入る
器の置所鷹等と井のやう

かこのまゝよく洗へば百虫の類
井の近所あらずへ近づくとを

極て驗あり **絶蛇蚰法** 螺螄と
取て水に浸し置節ふ入日其

水と増壁とをさば長く蛇
蚰とく **白髪去術** 三月八日

十日十三日此日早朝おあれて
東の方ふひひして白髪とぬ

く登し蹴り生る髪悉く
黒くするなり尤若き人乃白

髪をとるること
たかりと妙なり

三月之部終



